

0. 今回のセミナーの狙い

1. ピエール・クロソウスキーについて

2. 『歓待の掟』という書物

「ナントの勅令破棄」(1959 年発表)

「ロベルトは今夜」(1953 年発表)

「プロンプター」(1960 年発表)

3. 歓待について

歓待の掟 (LES LOIS DE L'HOSPITALITÉ)

この家の主人 (maître de céans) が何より優先さるべきこととして気にかけているのは、誰でも構わないから、夕暮れ時にやってきて、彼の食卓で晚餐をとり、彼の屋根の下に休んで道中の疲れを癒してくれるその顔に自らの歓喜を輝かせることである。彼は、門口にたたずみ、気もそぞろに待ちあぐねているのだ、異邦人 (étranger) が遠く地平線の彼方に解放者のごとくその姿を現すのを。そして、はるか遠くにその姿を認めるや否や、主人は息急いで彼にこう呼びかける。「お入りなさい、さあ！ 私は自分の幸福におびやかされているのです」。それ故、歓待を、それを供する者の魂に起こった偶発事 (accident) などとしてではなく、客を迎える男と女 (l'hôte et l'hôtesse) の本質 (essence) そのものとして受け取ってくれる者にであれば誰にでも、この家の主人は何も起こらぬ先から感謝の意を表明することだろう。第三者として現れたこの異邦人は、招かれた客としてこの本質を分かち持つことになる。この家の主人が異邦人と共に追求するのは、この異邦人がもはや偶発的ではない本質的な関係を受け取ることであるからだ。どちらも最初はそれぞれ孤立した実体でしかないし、互いに疎通関係 (communication) もない。あつたとしてもそれは所詮偶発的なものでしかない。[...] だが、この家の主人はここで、あらゆる偶発事の向こう側にあるすべての実体の根源へと (à la source de toutes substances au delà de tout accident) 遡るよう、異邦人に手招きする。かくして、主人は自分と異邦人との間に実体的な関係 (une relation substantielle) を開くことになる。ここに始まる関係はもはや相対的なものではなく、絶対的なものである。あたかも、今ここに入ってきたばかりの君との関係がもはや自分の自分自身に対する関係以外の何ものでもないかの如くに、主人と異邦人が区別しがたく混ざり合うのだ。

このような目的をもって、客を迎える男は招かれた客の中で自らを実現する。あるいはこう言ってもよいだろう。彼は招かれた客の一つの可能性を現実のものとし (actualiser une possibilité)、招かれた客である君も同様に、迎える男の一つの可能性を現実のものとするのだ。客を迎える男の何よりの喜びは、この家の女主人 (maîtrise de céans) の中で、いまだ現実のものとなっていない客を迎える女としての本質が現実化することである。招かれた客をおいて他に誰がこの任を全うし得ようか。(Les Lois de l'Hospitalité, p. 110 [『ロベルトは今夜』168-170 頁])

3. 『生きた貨幣』について

- ・ もとの論文は「サドとフォーリエ」（1970 年）。
- ・ 疏通不可能性（incommunicabilité）

参考文献

- アラン・アルノー『ピエール・クロソウスキー』野村・杉原訳、国文社、1998 年。
- ピエール・クロソウスキー『わが隣人サド』豊崎訳、1969 年。
- ピエール・クロソウスキー『歓待の掟』若林・永井訳、河出書房新社、新装版、1987 年。
- ピエール・クロソウスキー『生きた貨幣』金子訳、青土社、1999 年。
- ピエール・クロソウスキー『ディアーナの水浴』宮川・豊崎訳、水声社、1974 年。
- ルネ・シェレール『歓待のユートピア』安川訳、現代企画室、1996 年。